東日本大震災被災地における若者のライフコース

条件困難地域で生活する理由とコミュニティの復興

鈴木 勇（大阪成蹊大学）　**山本 晃輔**（関西国際大学）　**岡邑 衛**（千里金蘭大学）
榎井 縁（大阪大学）　**志水 宏吉**（大阪大学）　**高原 耕平**（人と防災未来センター）
宮前 良平（福山市立大学）

要旨

本研究の目的は東日本大震災の被災地である過疎地域の若者の現状を描くことにある。東日本大震災の特徴のひとつは、被災地の多くが高齢化と人口減少の課題を抱えた過疎地域であった点にある。本研究が調査地とする宮城県南三陸町は震災において壊滅的な被害を受けた。その後、今日に至るまで人口流出は止まっていない。

それでもなお、南三陸を居住地として選ぶ若者がいる。本研究では南三陸の若者のライフコースを分析することを通じて、条件困難地域における若者の生活と震災の影響を検討した。

調査の結果、南三陸を生活の拠点に選んだ若者のライフコースは、U ターン型、I ターン / 移住型、ローカル / 県内周流型ごとに特徴が見られた。そして分析の結果、第 1 に、彼らの「幸福」は、本人の職業選択と地域コミュニティへの参加の程度にもよると考えられた。第 2 に、若者は「地域愛着」「人間関係」「自己実現（就労）」の 3 つの理由から条件困難地域を居住地に選んでいることがわかった。そして第 3 に、若者は震災と無関係でいることはできず、震災からの復興の過程において、地域住民とのコミュニケーションを通して、今日的なコミュニティを形成する構成員となり、ソーシャルな課題と自己実現の両方に取り組んでいると考えられた。

目次

1．問題の設定
2．分析の枠組み
3．南三陸の若者のライフコース
4．南三陸の若者の語り①：3 つのローカル・トラック
4.1．ローカル・トラック
4.2．U ターン型
4.3．I ターン型
4.4．ローカル型
4.5．小括
5．南三陸の若者の語り②：なぜ若者は南三陸を選んだのか
5.1．地域愛着の語り
5.2．人間関係の語り
5.3．働くことについての語り
5.4．小括
6．条件困難地域の若者たち
7．南三陸におけるコミュニティの形成

キーワード

被災地
若者
ライフコース
コミュニティ

鈴木勇：suzuki-i@osaka-seikei.ac.jp

1.　問題の設定

「震災の影響は長期化する。学校がなくなれば子育て中の家族は転居する。若い家族が転居すれば町で消費する人が減る。消費者が減れば産業が衰退する。産業が衰退すれば町に戻る人がいなくなる」

この語りは本研究の調査地である宮城県南三陸町において、2014年に筆者らが町の将来展望について聞き取ったものである。東日本大震災は南三陸町に壊滅的な被害を与えていた。当時の聞き取りにおいて筆者らが収集しようとした語りは「町の復興」に関するものであった。しかし、実際に語られたことは、復興の遅れがドミノ倒しのように課題を膨れ上がらせ「町の存続」が危惧されるというものであった。「町の復興は、町が消滅する現実を延命しているだけ」という語りも聞かれるほど、震災と町の復興は絡み合った問題であった。

大阪大学人間科学研究科未来共創センターには、未来共生博士課程プログラムが参入している。未来共生プログラムが発足した2013年から、東日本大震災でのフィールドワークをカリキュラムのひとつとしてきた。被災地で生じる多様な問題は、未来の共生社会を考えるうえで必須の事柄であると考えられたからである。未来共生プログラムのフィールドのひとつが南三陸町である。南三陸チームは被害の爪痕が残る南三陸町で「早期」に避難所を解散させた南三陸町志津川小学校避難所の軌跡をとりまとめ、書籍として残すことに取り組んだ。避難所運営を分析することで教訓を導きだし、将来の自然災害に備える普遍的な知を析出することが狙いであった。こうした取り組みのなかで、筆者らはもうひとつの普遍的な課題を知ることになる。それは、震災前から南三陸は過疎地であり、町の将来が危ぶまれていたということである。小学校避難所が早期に解散したのも、小学校が再開されなければ町の周辺部に避難した子育て中の家族が町に戻ることができず、さらなる人口流出が生じるからであった。

東日本大震災の特徴のひとつは、被災地の多くが高齢化と人口減少の課題を抱えた過疎地域であった点にある。震災前から続く人口減少は、震災によってさらに加速し、被災地は深刻な人口減少と高齢化に直面している（阿

部 2015)。過疎地域の若者人口減少には、進学や就職が大きく関係している。過疎地域の多くには大学はなく、高校をもたない自治体も多い。これらの地域では中学卒業後、近隣地域の高校に進学することになる。地区内に高校がある場合でも高校を卒業した者は、町を出て進学するか、町を出て就職するか、町に残って就職するか、町から通うかの選択を迫られることになる。

震災は産業にも大きな打撃を与えている。震災前と震災後の産業は建設・運送業を別にすれば、30％程度しか売り上げが回復していないという調査結果もある（東北経済産業局 2021)。つまり、学校選択の時点で地域からの人口が流出しているなかで、さらに産業への打撃が町での生活の基盤や就労の機会を減少させ、学業修了後Uターンして故郷に戻るという選択肢を若者から奪うことになっている。結果的に、人口流出がさらに加速化している。

もっとも、東日本大震災の被災地では、震災後、若者の移住が増えているといわれる。その中には、ボランティアなどで震災時に活動した人がそのまま被災地にかかわり続け、移住者になるという事例が多いという。そして、地元の若者と共に地域おこしに貢献する事例が見られる。近年の都市部から過疎地域や条件困難地域への移住を促す「地域おこし協力隊」といった行政施策がこれを後押ししている。

以上をまとめると、東日本大震災の被災地域の若者は2つのストーリーの渦中にいる。第 1 のストーリーは、過去から続く若者の人口流出という現象である。地方部から都市への移動は、震災によって加速化された。そして地方部はこれまで以上の危機に瀕している。第2のストーリーは、東日本大震災によって新たな人的交流が生まれ、UターンやIターンの機会が提供されているというものである。

こうしたストーリーをふまえたうえで、本研究では、東日本大震災の被災地である過疎地域の現状を描く。特に注目するのは、若者たちのライフコースである。若者にとって南三陸を選ぶことは被災地というだけでなく、過疎地であるという現実に向き合わなければならない。多くの局面で社会問題や域内の衰退が語られる中で、なぜ若者は南三陸を生活地として選ぶのか。そこにどのような将来展望をみているのか。こうした点を南三陸の若者のライフコースを分析することを通じて検討することが本研究の狙いである。

以下、第2節では研究の枠組みを、第3節では南三陸町の若者のライフコースの現状を示す。そして、第4節、第5節では、町に暮らす人々のライフヒストリーに関する語りを検討する。そして、第6節、第7節では南三陸町における震災の影響を検討し、今後の展望を述べる[1]。

2.　分析の枠組み

日本では伝統的な研究領域として農村社会に関する蓄積があるが、これらは農村社会を独立して捉えており、高齢化や人口流出、若者の定住など「社会問題としての地方部」という観点が等閑視されてきたという（山本 1996）。本研究が論点とする過疎地域、地方部からの人口流出とは、戦後日本において累積し続けた社会問題であった。地方部から都市部への人口移動の主たる争点は、若者の労働力としての人口移動である。日本の高度成長期における地方部から都市部への「集団就職」は70年代まで継続してみられた。こうした労働移動は個人の選択というだけでなく組織化され、労働市場の支配力が全国化していった過程として捉えられる（片瀬 2010）。現在においては公共職業安定所を経由するだけでなく、インターネットなどを通じた求職など、地方部から都市部への就労は過去に比べれば日常的なものとなりつつある[2]。

地方部からの人口流出は労働・就労問題だけでなく教育問題としても検討されている。戦後日本社会では全国に公立学校が設置されたことは都鄙格差を埋めるものであり、教育の大衆化をもたらしたとされる（苅谷 1995）。教育環境が整備されることで、地方部から都市部への進出が労働力としてだけではなく、アカデミックな教育達成による地域間移動が恒常化していった。地方部での学校教育の成功者が、大学進学を機会に都市部へと進出、定着していく。こうした教育による社会移動はアカデミック・トラッキングと呼ばれ、教育社会学領域の重要課題として検討されている。アカデミック・トラックは出身地域による格差を是正してきたと見ることもできるが、地方部から優秀な人材を流出させてきたという側面もある。

ただし、地方部からの人材流出は、上述したような労働・教育の標準化のみで語ることはできない。本研究が特に依拠した研究は吉川（2019）による

ローカル・トラック論である。吉川は島根県のある高校出身者のライフヒストリーを収集することを通じて、地域移動の力学を明らかにした。ローカル・トラックとは「それぞれの地方の出身者が、アカデミックな進路選択とは別次元のものとして、自らの地域移動について選択していく進路の流れ」として定義される（吉川 2019:223）。たとえば地方部の進学高校を卒業後、都市部へ進学・定住するだけでなく、県内の大学に進学・就職し、場合によっては出身地に回帰する若者がいる。吉川によれば、島根県の場合は県内高等教育機関と県立高校の緊密な関係によってエリートの県外流出を「堰き止め」てきたという。この人口流出の調整、バランスをとることが地方行政や教育行政にとって、地方部維持の死活問題となる。

ローカル・トラック論の発見は都市と地方の若者を考える際に示唆に富む。まず「ローカル」という言葉通り、都市圏との地理的距離や教育機関の充実度によって、その「トラック」の様相に違いがある。そして地方部で生きる若者がローカル・トラックに乗る（乗らざるを得ない）という点で受動的な振る舞いをみせるも、ライフストーリーからは地方部を支える主体的で重要な人材であることもうかがえる。

本研究が対象とする東北にもローカル・トラックと呼びうるものが存在している（佐藤 2004; 石黒・李・杉浦・山口 2012）。次節で見るように、多くの地域の教育機関は高校までしか存在しておらず、その後の進学・就職先は東京圏か宮城県仙台市となることが多い。

もっとも、都市部に出ることはライフチャンスを拡大することに寄与するかもしれないが、ここでいうライフチャンスの「ライフ」を誰もが肯定し得るか、という問題もある。石黒・李・杉浦・山口（2012）においても、人材流出の影響は限定的で、Uターンする若者が地域を支えていることについても明らかにされている。都市部には都市部の社会問題が存在し、誰にとっても生活がし易いというわけではない。むしろ地方部から都市部への移動は下層労働者として位置づけられやすいというリスクを引き受けることにもつながるからである。

轡田（2017）は地方部での若者の生活には、「幸福のジレンマ」が存在するという。地方部での暮らしは、避けがたい地方の社会的問題を引き受けること

になる。時に「社会の幸福」のため地域活動に否応なくかかわらざるを得なくなる。一方で、地方部での生活は都市部にはない「個人の幸福」を追求することができる。つまり、地方を選ぶということは「自己実現」と「ソーシャルな課題」の両者の間に立ち、生活上の折り合いをつけなくてはならないのである。

以上のように、東北においては都市部への進学と就職が常態化している。南三陸町は過疎地域であり、さらには震災による大きな被害を被っている。南三陸の若者は中学校卒業後、もしくは高校卒業後、進学するためには都市部に出なくてはならない。ライフチャンスは圧倒的に都市部が優位であるなかで、ソーシャルな課題が山積する南三陸に回帰することは、なんらかの合理的理由が存在しているはずである。さらには都市部から南三陸を選んで移住する若者にとっても、この地域で生活することにもなんらかの合理性が存在しているのであろう。そしてそこでは「幸福のジレンマ」を引き受けつつ、折り合いがつけられているはずである。したがって、本研究は被災地である南三陸の若者の定住を検討するものであるが、それとともに条件困難地域における若者のライフスタイルといった観点についても検討する。

3.　南三陸と若者のライフコース

前節で見たように、東北では都市部に若者が流出し続ける構造にある。都市部に一度出て、仮にUターンしたとしても、就職できる機会が少ないことが若者の定住を阻害してきた（李・石黒 2005）。

図1・図2は国勢調査からみる市町村レベルの人口の増減を地図上に示したしたものである。図1が2010年の10歳～14歳の国勢調査データ。図2は図1から10年後、2020年の20歳～24歳の国勢調査である。人口の増減なので、地域間の人口移動を示すものではないが、2010年から2020年にかけて、多くの地域で同年齢帯が減少していることがわかる。人口が100人以上増加した地域は、一部を除けば仙台周辺地域だけである。

以上をふまえたうえで、南三陸町の概況もみておきたい。本研究の調査地である南三陸町は宮城県北東部に位置する。一方には太平洋に面するリアス式海岸を有し、もう一方は田束山（たつがねさん）などの山々に囲まれた、自

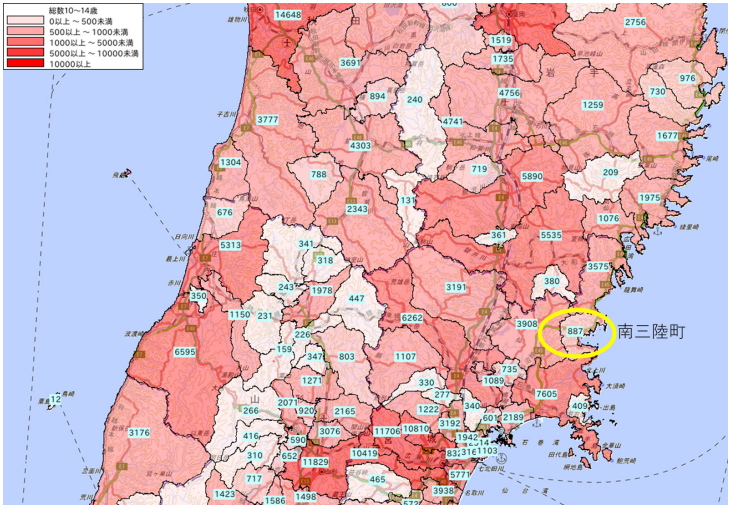

図１　2010年国勢調査による（10～14歳）人口

出所：国勢調査データをjSTAT MAPを利用しGoogleマップにプロット（筆者作成）

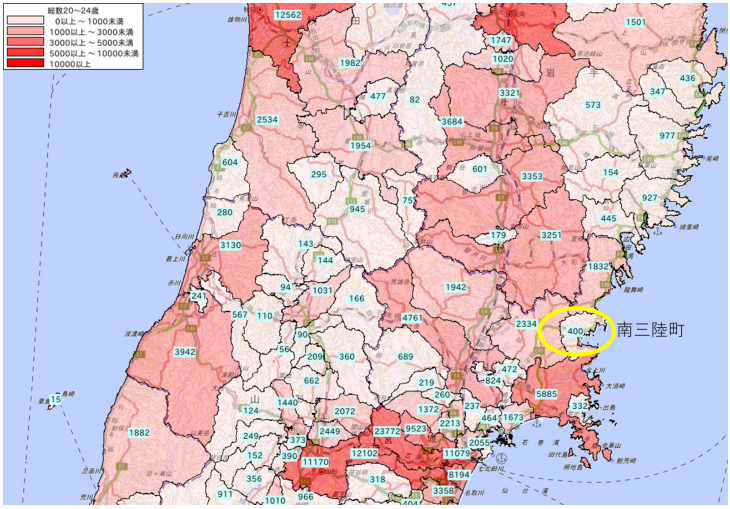

図２　2020年国勢調査（20～24歳）人口

出所：国勢調査データをjSTAT MAPを利用しGoogleマップにプロット（筆者作成）

然豊かな町である。産業としてはカキ、ホタテ、ワカメなどの養殖業・水産業を中心とする。もともとは別の町であった旧志津川町と旧歌津町が2005年10月に合併し南三陸町が誕生した。2011年の東日本大震災により、死者620人、行方不明者211人、全壊3,143戸（世帯数の約6割）、最大避難者約1万人という甚大な被害を受けた（南三陸町 2022）。

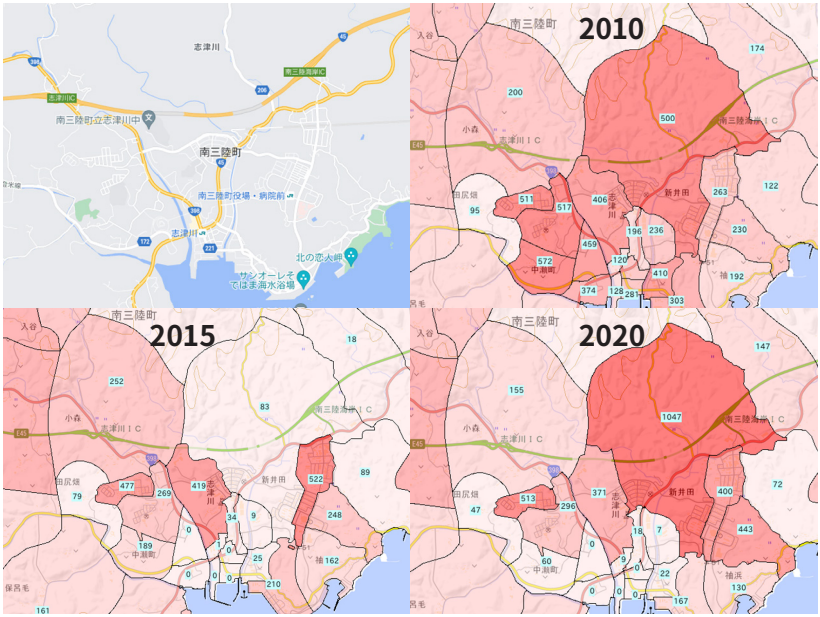

図3　南三陸志津川町地域の人口の推移
出所：国勢調査データをjSTAT MAPを利用しGoogleマップにプロット

町の人口は、1960年代から減少を続けていたが震災によってその速度がさらに速まり、2011年2月末時点で17,666人、5,362世帯であったものが、2022年7月末には12,089人、4,462世帯となっている。図3は震災前の2010年から2020年にかけての人口を図示したものである。2010年に人口が集中していた地域が、震災の影響で仮設住宅などの移動が生じ、2020年には高台移転を経て生活の拠点が変わったことを示している。

1節で述べたように、町の復興を急がなければならなかったのは、そうし

なければ町からの転出がさらに加速するからであった。とりわけ子育て中の家族にとっては、震災が都市部移転の契機になる可能性があった。実際、震

表１　南三陸町の就学者数

	幼稚園児数	小学生	中学生	高校生
2006 年	78	1130	611	454
2007 年	79	1085	596	428
2008 年	78	1005	580	413
2009 年	70	949	570	418
2010 年	75	922	565	413
2011 年	0	642	433	389
2012 年	51	655	441	362
2013 年	52	646	398	355
2014 年	41	631	366	314
2015 年	40	596	328	295
2016 年	33	558	340	258
2017 年	35	535	335	237
2018 年	34	501	326	201
2019 年	29	475	309	199
2020 年	33	448	302	190
2021 年	40	452	270	173

出所：社会・人口統計体系各年次データ

災前に 1,000 人いた小学生は 2021 年には半減している（表1）。

南三陸町には小学校5校、中学校2校、県立高校1校がある。南三陸の教育環境で重要な点は吉川（2019）が指摘するローカル・トラックの存在だろう。過去より、南三陸出身者には（1）高校進学段階で、南三陸にある志津川高校に進学するか、進学しないかを決める。進学校は近隣の登米市や気仙沼市、石巻市にあり、こちらを選択した場合は公共交通機関を使用して1時間程度かけて通学することになる。そして（2）卒業後に大学・専門学校がないので、地元就職するか、都市部に出るかといった選択がある。

地元中学校と高校は連携関係にあり、地元高校である志津川高校への進学

を後押ししてきた。しかしながら、震災前から地元中学校からの進学者は激減している（図4）。県立志津川高校はまもなく100周年を迎える伝統ある学校であるが、近年定員120名に対し充足率が5割を下回り、廃校の危機に瀕している。

こうした進学動向の変化は、震災前から緩やかに生じていたが、震災からの復興がそれを加速化させたとされる。震災前の南三陸には町の中心部を鉄道（気仙沼線）が横断していたが、震災によってバス交通に切り替わることになった。バス交通は鉄道に比べれば所要時間がかかるものの、網目状の交通網は地域外の進学先であった高校と南三陸町内を直結したことで、高校に通うことはむしろ便利になったという。その結果、地元中学から志津川高校への進学者数は、震災前の6割から4割へと減少していった。こうした状況をふまえ、志津川高校では2023年度より宮城県の公立高校で初となる全国募集を始め、高校改革に乗り出している。

図5は志津川高校卒業後の進路を示したものである。これをみると就職が50%、進学が50%となっている。地域には大学や専門学校はないので、進学する際には町外に出て生活することが南三陸町では当然のこととなっている。また地元からの人口流出を防ぐため、志津川高校では地元企業とのコラボレー

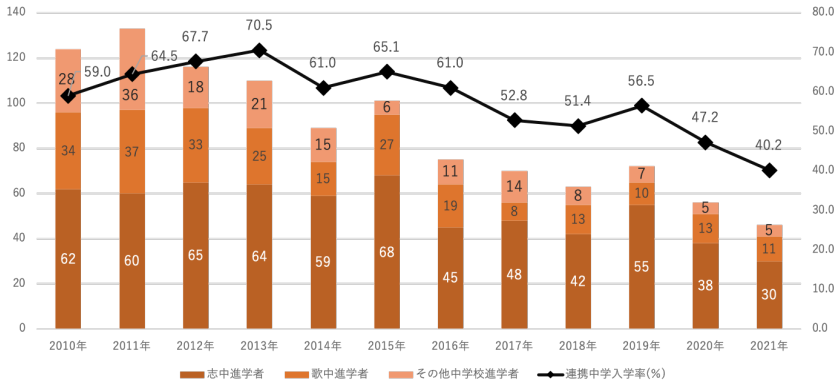

図4　地元中学校からの入学者の減少
出所：南三陸町

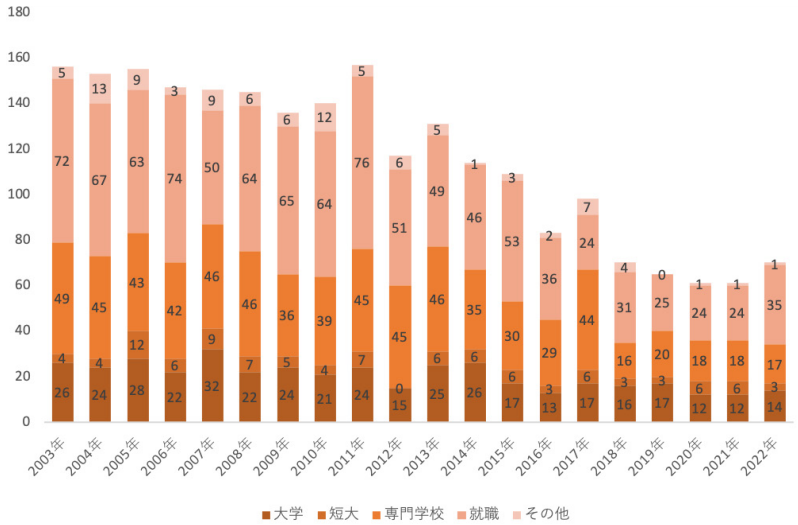

図5　志津川高校卒業後の進路
出所：志津川高校提供資料から作成（既卒者を含む）

ションやインターンにも力を入れてきた。それでもなお状況は厳しい。志津川高校の卒業生を対象とする研究によると、2002年のデータでは進学者数よりも就職者数のほうが多いものの、地元就職者は少なく、仙台や県外などの就職者が多い（安田 2003）。そして志津川高校の状況を「地元の求人は少ない。公務員の枠も限られている。自宅通勤できる職場であれば仕事は選べず、自宅を離れて就職しても経済的ゆとりはほとんどない。過疎と交通不便が職業選択を規定する典型」として位置づけている（安田 2003:48）。こうした南三陸をとりまく若者の状況は、震災によってより切実な問題となっていったのである。

以上をふまえたうえで、本研究では、南三陸町をフィールドとし、町で生まれ育った若者[3]や移住者など33名に半構造化インタビューを実施した。インタビュー対象者は、旧知の南三陸住民を頼りスノーボールサンプリングによって選定した。ただし、「地域で成功し話しやすい若者」だけがインタビュー対象となりかねないことも予想された。そのため、特定の企業関係者に在職

中の若者をまとめて紹介してもらうなど工夫を重ねたが、インタビュー対象者の選定には一定程度のバイアスが存在している。また、若者の雇用者や行政関係者の調査期間は2020年9月、2021年12月、そして、2022年8月である。調査対象者は表2に示した。

表2　本調査の対象者

仮名	性別	年代	移動形態	最終学歴	現職
L1	男性	10代	ローカル（地元定住）	高卒	地元就職
L2	男性	10代	ローカル（地元定住）	高校生	
L3	男性	10代	ローカル（地元定住）	高卒	地元就職
L4	女性	20代	ローカル（地元定住）	高卒	地元就職
L5	女性	20代	ローカル（地元定住）	高卒	地元就職
L6	女性	10代	ローカル（地元定住）	高校生	
L7	男性	10代	ローカル（地元定住）	高校生	
L8	男性	30代	ローカル（周流）	専門卒（仙台）	団体職員
L9	男性	30代	ローカル（周流）	専門卒（仙台）	自営業
L10	男性	20代	ローカル（周流）	大卒（仙台）	地元就職
L11	男性	40代	ローカル（周流）	大卒（仙台）	地方議員
L12	男性	20代	ローカル（周流）	大卒（仙台）	団体職員
U1	男性	30代	Uターン	大学院卒（山形）	自営業
U2	男性	40代	Uターン	大卒（山形）	団体職員
U3	男性	30代	Uターン	専門卒（東京）	団体職員
U4	男性	30代	Uターン	専門卒（東京）	自営業
U5	女性	20代	Uターン	大卒（山形）	無職
I1	男性	30代	Iターン	中卒（大阪）	自営業
I2	男性	30代	Iターン	大卒（東京）	団体職員
I3	男性	40代	Iターン	大学（東京）	自営業
I4	女性	30代	Iターン	大卒	自営業
I5	女性	20代	Iターン	大卒（東京）	団体職員
I6	女性	30代	Iターン	大学院卒（東京）	会社員
O1	男性	50代	Uターン	専門卒（東京）	自営業
O2	男性	70代	ローカル（周遊）	地元高卒	自営業
O3（L2保護者）	男性	50代	Uターン	高卒	役場職員
O4	男性	40代	NA	高卒	役場職員
O5	男性	60代	Iターン	大卒（東京）	自営業
O6	男性	70代	Iターン	専門卒（東京）	自営業
O7（L6保護者）	男性	50代	Uターン	専門卒（仙台）	自営業
O8（L7保護者）	男性	50代	ローカル（定住）	高卒	自営業
O9	女性	30代	NA	NA	団体職員
O10	女性	40代	NA	NA	団体職員

本調査を通じて収集したインタビュー対象者は、移動形態から（1）Uターン型（2）Iターン／移住型（3）ローカル／県内周流型にわかれる（図6）。この移動形態は、南三陸出身の若者の人生を大きく水路づける。そのうえで、本調査は「南三陸で生活している」若者を調査対象としている（黄色網掛け）。なお、本研究の実施にあたっては研究代表者の所属する大学の研究倫理審査委員会において承認を得た（承認番号　大2020-29、大2022-31）。

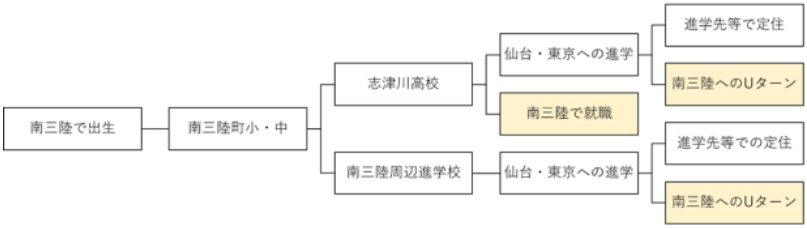

図6　調査対象者のライフコースのパターン

4.　南三陸の若者の語り①：3つのローカル・トラック

4.1　ローカル・トラック

吉川（2019）は1990年代、島根県にある公立高校の卒業生の進学先と就職先から、彼らの地域異動を4つの類型に分類し、「ローカル・トラック」と名付けた。大学進学時に県外の都市部に出て、そのまま都市で就職をする都市定住型、県外の大学などに進学するが、県内に戻って就職するJターン型、さらに故郷に戻るUターン型、最後に、一貫して県内に住み続ける県内周流型である。ただしここでは、調査対象をひとつの高校の卒業生としていることから、県外からその土地に移住するIターン型は想定されていない。

本研究は、この分類を参考に、調査時に南三陸に居住する調査対象者をUターン型、Iターン型、ローカル型（県内周流型）に分類した。ここに都市定住

型を含まないのは、調査対象者を南三陸に居住するものに限定したためである。

本節では3つに分類した調査対象者それぞれの語りを分析し、その中に共通点を見出すことを試みる。当然ながら、人にはそれぞれの人生がある。しかしそれでも、この分類ごとの共通点を見出すことができるのではないか、という仮説をもとに、以下、Uターン型、Iターン型、ローカル型それぞれから、特徴的な語りをした2名を抽出し、その語りを検討する。

4.2　Uターン型

南三陸で生まれ育ち、一度は故郷を離れたものの、現在は南三陸で生活する若者の語りをここでは見ていく。語りから見出された特徴は、「1度は（南三陸を）出たほうがいい」という一種の規範意識があること、東日本大震災がひとつのUターンのきっかけとなったということである。ここではU3とU4の語りを見ていきたい。

U3は南三陸出身の30代男性である。志津川高校を卒業後、あこがれていた東京に行き、専門学校を卒業した。安定した職に就いていた両親は、東京への進学をサポートしてくれたという。いくつかの職を経験し、仙台で勤務中に被災している。当初、南三陸に戻るつもりはなかったが、震災後は南三陸と仙台を行き来し、南三陸で仕事を見つけたことを機に、地元に戻り、定住している。現在は、南三陸のグッズを製作する会社の代表として働いている。

一方、U4は家業である老舗鮮魚店に勤める30代男性である。自身は直系ではないため、必ずしも家業を継がなければならない立場にはなく、将来の職業は自由に選ぶことができたという。子どものころから都会へのあこがれがあり、高校卒業後に上京した。ところが、東京での生活に馴染めず、南三陸に戻り、家業を手伝い始めた。その後結婚し、家庭をもつ。「このまま歳をとるのかな」と思っていたところ、南三陸で被災することになった人物である。

4.2.1.　「1度は出たほうがいい」という語り

Uターンした若者は、そもそもなぜ南三陸や東北地方から出るという選択をしたのだろうか。このことに関して、2人は以下のように語っている。

- U3：個人的な意見としては一回出たほうがいいと思う。なんでかって言うと、俯瞰した目で見れる、町に対して。やっぱり一回外に出ることによって（南三陸の）内と外の良いとこ悪いとこが見える。自分のかかわりが明確になると思うので。漁業とかやってる人はそのまま（外に出ずに）たぶん家の仕事を継いでとかってあると思う。それ自体、俺は否定しないし、それはすごいと思う。ただ、もし進学してとかっていう人であれば、一回外に出て、見識を広めるじゃないけども、俯瞰した目で見れると、結果として町に対して、もし帰ってくるとかなった時に活きる事ってあるのかなって思いました。

- U4：うちは、（仕事は）好きにしたらいいじゃない、みたいな感じでしたね。うちの母も父も、長男、長女ではなくて、一度関東のほうで仕事をしてから帰ってきて、地元で結婚してるんですけど。なので、（両親）2人とも東京に出てて、仕事をしてたっていうのもあったんで、「世の中は広いから見てきたほうがいいんじゃないか」みたいなのは、ずっと言われてましたね。

このように、Uターンをした若者たちは、1度南三陸を出ることは、自分自身にとってプラスであるという意識をもっていた。それは、南三陸では得られない経験や資源を都会で得ることができ、それがその後の人生に役立つと考えているからである。U4のように「1度は出たほうがいい」という一種の規範意識が家族などの間で共有される場合もあれば、U3のように実体験からその意識をもつようになった場合もあった。

4.2.2.　きっかけとしての震災

このような規範意識をもっていたかどうかに限らず、Uターンをした若者ははじめから故郷に戻ってくることを意識していたかというとそうとも限らない。たとえば、U4は東京での生活に馴染めずに、南三陸に戻ってきた。また、以下の語りに見るように、U3は震災がきっかけで南三陸に戻ってくることになったという。

- U3：（東京に出た時は、いつかは帰ってこようと）思ってなかったですね。なので結論としていうと震災きっかけで戻ってきたって感じですね。多分震災がなければ戻ってこなかったと思いますね。震災がなければ家の人といる安心感を感じるとかも多分なかっただろうし。良くも悪くも震災がきっかけで変わってしまった一人かなと思いますけどね。

このように、震災がきっかけとなり、U3は南三陸に戻ってきた。震災を通して、故郷や家族のかけがえのなさを感じて地元に戻ったという語りはUターンをした人々に共通に見られた語りの一つである。

一方で、震災発生時にはすでに南三陸で働いていたU4にとって、震災はまた別のきっかけを与えていた。

- U4：東京に行ったからではなくて、僕は震災だと思ってるんです、自分がこうなったのは。（中略）10年とか20年ぐらいの多様な人間と1年2年とか、震災後の3年ぐらいで、ギューってバーっていろんな人に会って、支援や講演っていう、結構そのときに、そういうビジネス系の勉強会とかで、支援してくれるっていう人も結構いたので。（中略）圧倒的に、それでやっぱり圧倒的に変わりましたね、僕は。

震災後の復興支援で、普段南三陸で出会うことがない、都会のビジネスパーソンたちと出会ったU4は、そこで築いたつながりを資源として、現在の仕事を変化させたという。多くのものを奪った東日本大震災は、一方で、故郷を後にした若者たちを南三陸に引き戻すとともに、南三陸に多様な資源をもたらしたのである。

4.3. Iターン型

次に、Iターンをした若者、つまり南三陸ではない土地に生まれ育ち、南三陸に移住してきた若者たちについてである。ここでは、I5とI6の語りを見て

いきたい。

I5は関東出身の20代女性である。高校生時代に震災が発生したが、高校在学時には被災地へボランティアに行くことができなかった代わりに、募金活動などを行っていたという。高校卒業後に、復興支援のためのボランティアに参加したのが南三陸との出会いである。子どものころから発展途上国の支援に関心があったという。東京の大学で農業を学んだ後、就職とともに南三陸に移住し、その後、南三陸で家庭をもっている。ボランティア時にできたつながりに加え、現在は南三陸に住む若者のネットワークも広げつつある。

I6は関東出身の30代女性である。大学院生時代に震災が発生し、ボランティアで初めて南三陸を訪れたという。その後、大手メーカー企業でインフラ系の仕事に就き、新人研修やイベントで何度か南三陸を訪れている。人口減少や高齢化の中で変わりゆく南三陸を身近に知りたいと思い、企業を退職後、南三陸に移住し、創業支援の事業に従事している。

4.3.1. きっかけとしての震災

Uターンした若者と同様、Iターンした若者たちにとっても、震災は一つの契機、具体的には、南三陸とかかわりをもつ契機となっている。I5、I6ともに、復興のための震災ボランティアとして南三陸に偶然訪れたことが、南三陸にIターンするきっかけとなっていた。

- I5：最初、一日目から涙が止まらなくて（中略）（震災後）2年たってここまでしか進んでないんだなっていうことを感じたり。無力さっていうか、なんだろう、なんか2年間ボランティアに行きたいって思ったり、募金とかバザーでやれることはやってたのかもしれないけど、来てみたら、あれこんな、まだこんな感じだったんだっていう。その、思ってた感じと現実は違うんだなっていう、そのギャップにただただ心折られるじゃないけど、なんだろう挫折でもないけど、なんかそういう結構ダメージは大きかったです、自分の中で。でも「笑うしかないんだよ」って（被災地の人に）言われて。泣いてたって何も進まないから、その“お母さん”は3日で泣くのやめたって言ってて、

そこから笑って毎日進むしかないんだから、あなたたちがめそめそしてたって意味ないんだから、笑って元気にやってくしかないんだぞ、みたいな言われて、そこでハッとさせられて。

- I6：2016年の5月に、社会人対象の南三陸に限らず東北何県かで、現地を知るためのフィールドワーク、二泊三日のフィールドワークがあって、（中略）その中を見てみると南三陸もあったので、（前回訪れた）2013年から3年間時間経ってしまってるので、現地どうなっているかなっていうのを見に行きたいなと思って、それで参加しました。（中略）漁協の方とか漁師さんとかにお話を伺うっていうフィールドワークでした。その時のこっちの現地側のコーディネーターが今の会社の代表です。

I5は、ボランティアで出会った現地の「お母さん」からかけられた言葉によって、被災地に生きる人々の生き方に「ハッ」とさせられ、そのことが心に強く残っているという。この被災地の女性との関係はその後も続き、I5がIターンする際のひとつの心のよりどころとなっていた。同様に、I6は度々南三陸を訪れる中で、ある人物に出会い、南三陸に移住し、その人物が代表を務める会社に従事している。いずれも、震災がきっかけとなりボランティアとして南三陸に訪れさまざまなことを経験し、その過程で出会った人々とのつながりがひとつの支えとなって南三陸に移住してきたのである。Iターンをした人たちの中には、ボランティアを経験していない人もいるが、その多くは震災がきっかけで南三陸を訪れ、そこで出会った人々との関係が支えとなり、移住をした人々であった。

4.3.2.　地方に住むことの難しさ（1）コミュニティとのかかわり

このように、Iターンをしてきた若者たちには共通点も見出されるが、一方で、相違点も見出された。具体的には、Iターンで南三陸に住む若者の地域コミュニティへのかかわり方の相違である。ひとつは、その土地の風習に順応していこうとしている人たちである。もうひとつは、地域住民とも適度な距

離を保ちつつもかかわり続ける人々である。I5は前者にあたり、I６は後者にあたる。このような違いは、地方に住むことの難しさにも影響を与えているように思われた。以下の語りを見ていきたい。

- I5：しんどいといっぱいありました。（中略）近所の親戚じゃない人が親戚みたいだし、距離感が近すぎるんですよね、なんか。噂も1日経ったら回ってるし、（中略）一人で住む限界を割と感じてて、給料も低いし、この辺の地元の給料って、1年目に提示されてる額が16万ちょっとで、手取り13万くらいなんですよね。で、家賃5万円で。（中略）車のローン払って、保険払ってたら、本当に暮らすのに精いっぱいで、気づいたんですよね。みんな米があって、家もあるんだなって。それありきでみんなこの給料で暮らせてるんだなって気づいてきて。だから職場の人たちが（私を）かわいそうに思って米をいっぱいくれたんですけど。っていう生活をしてる時に、これって地元の家に入って暮らさないと（生活するのは難しい）、この町で。

- I6：多分私は比較的恵まれていて、仕事柄結構早い段階からいろんな人に会っていたんですよね。（中略）プロジェクト組成の段階で、地元の農家さんとか、役場の方とか、いろんな方に結構町内外を含めて会ったりとかしていたので、そこでいろんなつながりもできましたし。（中略）地域の行事に参加しなきゃいけないっていう状況になったことはないです。今まで。それはこの町の方が気を利かせてくださっているのかどうかは、よくわからないですが。そういう状況には今のところなってないです。

I5の語りからは、地方で暮らすことの難しさがうかがえる。近所の住民との距離感やプライバシーのとらえ方の都会との違いや、自作の食料や持ち家がないことの大変さは、都会からIターンし、地方で職を得た若者の共通の悩みである。一方で、I6のように地方での人間関係は大事にしつつも、地域の行事や役割は免除され、地域住民とも一定の距離を保ちつつ生活することが

可能な人々がいることもまた事実である。地域コミュニティの親密さは、一般的に都会であればあるほど疎なものとなり、一方、地方であればあるほど密なものとなる。地方に移住する若者たちが、その土地でうまく生活しようとする際に感じる困難さは、このような地方のコミュニティにどれほど深くかかわっているのかということと、どのような職業に従事するかによると考えられる。つまり、地域コミュニティに深くかかわるほど、都会との違いによる困難さは増すが、それを乗り越えるか、もしくはそもそも深くかかわらないことによって、生活の満足度は一定保たれていた。また、その土地に元からある職に従事するという場合、地域コミュニティに深くかかわらざるを得ないが、一方で、その土地になかった新規事業に携わるなどすることによって、地域コミュニティからはある程度独立した生活を送ることも可能である。

4.3.3.　地方に住むことの難しさ（2）買い物・娯楽

都会と地方の大きな違いとして、買い物の不便さや娯楽のなさを挙げることができるだろう。南三陸町にはスーパーやコンビニ、個人商店はあるものの、大きなショッピングモールがあるわけでもなく、また、映画館などの娯楽施設も見当たらない。ところが、南三陸での生活についての以下の語りからもわかるように、移住した若者の多くは、この点についてあまり不自由に感じていない。

- I6：そんなに困ったことはないですね。（中略）スーパーもあるし、何か必要なものはAmazonとかネットで買えるし、コンビニはあるし。日本ってすごい便利な国だなって反対に思ったくらい、困ったこと不便に感じたことはないです。

このように、近所のスーパーで手に入らないようなものは、インターネットを通じて購入することができるし、さらには、映画等もインターネットを通じて観ることができるという。たとえば、2015年よりサービスを開始したNetflixは急速に普及しつつある。これらのインターネットサービスを使うことによって、地方での生活の不自由さを補完している若者が多いと考えられる。

4.4.　ローカル型

最後に、ローカル型の若者、すなわち、基本的に地元や遠くとも県内から出ることなく、そこに住み続ける若者たちについてである。ここではL8とL12の語りを見ていく。

L8は地元志津川高校を卒業後、仙台の専門学校へ南三陸から通学し続け、卒業後、南三陸町の臨時職員として勤務、その後、地元企業に就職した男性である。震災後に退職し、震災関連の仕事をいくつか経験後、現在は南三陸の情報を発信する企業で勤めている。

一方、L12は福島県で出生してはいるが、幼少期に父親の故郷である南三陸に引っ越して以来、志津川高校卒業まで南三陸に居住した男性である。仙台の大学に進学し、卒業後、南三陸町の観光協会に就職。その後、一般社団法人を設立し、現在はその代表理事を務めている。

4.4.1.　進学・進路について

志津川高校は南三陸町に唯一存在する高校である。この高校を卒業後、地元に残る若者はほんの一部である。現在30代のL8が「町内に残ったのは多分一割、二割、二割くらいかな。後は大体ほんと進学、町外への就職っていう感じかなと思います」と語った状況は、現在もそう変わっていない。その理由の大きなひとつに、町の就職先が少ないという事情がある。町に残るということはすなわち、家業を継ぐことも含めた、数少ない選択肢から職業を選択するということである。自分の希望する職種がそこになければ、希望していなかった職に就くか、あるいは自分で起業でもしない限り、町を出る以外に選択肢はない。

そのような事情があるにもかかわらず、地元に残るという選択肢を取った若者たちの進路、進学についての意識は、どのようなものだろうか。高校生の時に被災したL12は以下のように語る。

- L12：（高校卒業後の進路について）一回じいちゃんに相談しに。避難所は別々だったんですけど、この話をしていて、そのときは（建築

業を営む）じいちゃんからは、「これからの10年よりも、その先20年考えろ」みたいなことを言われていて。建築が必要な10年のうちの復興は自分たちが頑張るから、残り、先の繁栄につながる10年をおまえたちが何とかできるように、いま学びたいことは学んで、それをしっかり武器にして使えるようになって帰ってきなさいっていうことだけ言われて。

L12のように、ローカル型の若者には、Uターンした若者と同じく「1度は町を出る」という意識を自分自身で強くもつ若者もいるが、そうでない場合もあった。共通するのは、家を継ぐことを期待されている若者や、家族の面倒をみることを期待されている若者など家族の意識や事情も大きく影響していることである。

4.4.2. 郷土愛

志津川高校を卒業した後や仙台の大学を卒業した後に、彼らはなぜ県外に出ようとしなかったのだろうか。彼らを引き留めたのは、上述したような家族の意識や事情もさることながら、それ以上に、故郷に対する愛着であった。L8、L12は以下のように語っている。

- L8：（震災後の給水アルバイトで）いろんなとこ行って、地名覚えて、南三陸ってこんな広いんだみたいな。僕結構好きだったのは、電車降りると結構潮の香りがしたんですよ。そういうのを思い浮かべた中で、僕この町で何もしてないなみたいな。何もしてないっていうか、恩返しというか、この町で何もしてないなっていう勝手な思いがあって。やっぱりこの町いいなみたいな感じで。当時の風景とか。

- L12：（東京に出たいとか）一切なくて。ずっと地元が、何か不思議と愛着があって。逆にいうと、東京とかに対する憧れってなかったかもしんないです。変にそこまで他の地域とか、都市部に行って住もうみたいな感覚はあまりなく、それがいいことだとか、それがかっ

こいいとかは一切なくて、それよりも地元に帰ってきたいというほうが（大きかった）。

この地元への愛着は、「潮の香り」や「波の音」に代表される、南三陸の自然に対するものであったり、または、そこに住む住民に対するものでもあった。2011年の大震災に伴う津波は、その風景や人々をも飲み込み、彼らから奪ってしまった。それでも彼らがそこに住む理由は、L8が語った、記憶の中の「当時の風景」を見続けているからかもしれない。

4.5.　小括

ローカル・トラックごとに語りの共通点は見出されるのかという問いを立てたが、これまで見てきたように、それぞれの語りからはローカル・トラックごとの特徴が浮かび上がってきた。吉川（2019）の当初の調査研究とは地域も時代も異なるが、ローカル・トラックの分類は現在の南三陸においても意味をもつものであると言えるだろう。

本研究が対象とする若者たちの語りは、轡田（2017）の主張を裏付けるものも多かった。轡田（2017）の要点は、①地方暮らしの若者の「幸福」は社会的属性に影響を受けているということ、②地域満足度格差よりも、モビリティ格差が重要であること、③地域や社会に開かれた若者のモチベーションは多様であり、それを認めることは若者が地方に暮らすことにつながるということである。

本分析からの知見は、①地方暮らしの若者の「幸福」は、本人の職業選択と地域コミュニティへの参加の程度にもよると考えられること、②若者が地方で暮らすことの満足度を高めるものはモビリティに加えて、インターネットの活用が大きいことである。

さらに、本研究はこのような地方への若者の移動の背景に、東日本大震災という大災害がいかなる影響を与えたのか問うことに主眼がある。若者の語りからは、震災の功罪が浮かび上がってきた。第1に、震災がなければ、Iターンの人たちは南三陸でボランティアをすることもなく、現在、南三陸に移住することはなかったはずである。また、Uターンをした人たちの一部は、震

災がなければ地元に戻ることはなかっただろう。震災は過疎化を促進した反面、新たに若者をひきつけたということができる。第2に、震災後の都市部からの人と情報の流入は、地元に残った若者の働き方や彼らが行う仕事をよい方向に変えた側面がある。震災に伴う津波によって店舗が流され、主な消費者層である地元住民が減少した一方で、震災を機に都会から持ち込まれた新しいビジネスモデルやそこで生まれたつながりによって、若者の働き方や仕事内容が変化したと考えられる。第3に、震災や津波は南三陸の風景や人々を奪ったのであるが、だからこそ、その地に住み続ける人々や故郷から離れている人々の故郷への愛着が増し、その結果、一部の若者たちを地元に引き戻し、また、地元にひきとどめさせていた。

東日本大震災とそれに伴う津波は、若者の移動に多かれ少なかれ影響を与えた。震災は発生しないに越したことはない。そのことは紛れもない事実である。しかし、震災を乗り越えてそこにいきいきと生きる若者たちの語りから見えてきたことは、震災の悪い影響だけではなく、それを良いものへと変換してきた人々の生命力だということができるだろう。

5.　南三陸の若者の語り②：なぜ若者は南三陸を選んだのか

ここでは、移動形態の類型だけでは把握しきれない若者の多様性を検討したい。なぜ、インタビュー協力者は南三陸に移住したり、南三陸町から転出せずに生活を続けているのだろうか。こうした疑問は、本研究の問題関心に寄せていえば、(1) そもそも南三陸には仕事がなく、(2) 東日本大震災で大きなダメージを受け、(3)南三陸以外でも働く場はあるにもかかわらず、なぜ若者は南三陸を選んだのかということである。

インタビュー協力者が語った南三陸への移住と生活の語りを整理し、「地域愛着の語り」「人間関係の語り」「働くことについての語り」を紹介する。

5.1.　地域愛着の語り

地域愛着志向の語りとは南三陸への愛着を示す語りであり、それは同時に南三陸の復興といったソーシャルな課題をふまえたものとして語られていた。

前節でも言及したL8は、南三陸生まれで過去に南三陸以外での生活経験はなく、震災前までは南三陸での閉塞感を感じていたという。被災して多くのボランティアがやって来る中で、南三陸町の良さに気づき、何もしてこなかった地域への恩返しとして、南三陸で生活し続けることを決めた。

● L8：「震災で再確認」

（震災後の給水アルバイトで）いろんなとこ行って、地名覚えて、**南三陸ってこんな広いんだみたいな。僕結構好きだったのは、電車降りると結構潮の香りがしたんですよ。**そういうのを思い浮かべた中で、僕この町で何もしてないなみたいな。何もしてないっていうか、**恩返し**というか、この町で何もしてないなっていう勝手な思いがあって。やっぱりこの町いいなみたいな感じで。当時の風景とか。

ここで、興味深いのは、震災を経験することで南三陸町の大きさ、つまり、南三陸の境界線が明確になっているという点である。そして、それと同時に故郷である南三陸町への愛着を確認している。

ただ、震災前にはとにかく南三陸町を出たかったという人もいる。

● U4：「地元が嫌だった」

田舎がとにかく嫌だったっていうのはありましたね。**中学生ぐらいからもう漠然と東京に行く。地元を出よう**っていうのは思っていましたね。周りもかなり僕らの同学年の子たちは、そういう子が多かったと、**実際にやっぱ出た人間は多かった**と思いますね。

この語りからは、南三陸を出て、どこで何をしたいという具体的なイメージがあるわけではなく、ただ漠然と都会なるもの（≒東京）へあこがれているということがうかがえる。

震災時のボランティア活動を通じて南三陸町とかかわり、最終的には同じく支援活動をきっかけに南三陸町に通うことになった男性と結婚し移住することになるI4は、すでにボランティアとしてかかわっていた時点で、南三陸

町が自分にとって落ち着く場所だと感じていたと言う。

● I4：「ホーム感」

（当時生活していた）東京よりもこっちのほうが知り合いも多いし、そのときには**既にホーム感ができてて。**

結構こっちの暮らしが普通に楽しくなってきたというか。**支援とかっていう意味ではなくて、本当に暮らす場所として楽しくなってきた**っていうふうな感じですかね。

I4は南三陸町へのそうした思いを「ホーム感」という言葉で表している。ホームとは言うまでもなく、自分が本来いるべき居場所という感覚であろう。I4は高校卒業までを四国の田舎で過ごし、大阪での大学生活を経て、東京で働いていた。その東京よりも南三陸の方が自分の居場所としてしっくりくるというこの感覚は、特に都会に暮らしている若者にとっては珍しいものではないのかもしれない。近年の地方への移住者の多くはこうした地方へのあこがれをもっていると言えるだろう。

● I6：「手段としての地域」

死ぬまでここにいるってことは無いと思います。やっぱり最初にお話しした、この町でやることを、いずれこの町と同じように少子化を迎えるどこか違う地域、特に違う国に活かしたいという思いは私の中にはあるので、**その時、自分のやってきたことを一番活かせそうなフィールドに身を置くことが出来ればなと思っています。**

Iターンで南三陸町にやってきた人の中には自分の求める仕事の形を実現するために移住してきた人も多い。こうした人たちに共通するのは、移住した時点では南三陸町はあくまでも自己実現のための「手段」であり、他でもありえたという点である。そのことがI6の語りに特徴的に表れている。

もちろん全員がというわけではないのだが、こうした移住者の中にも、南三陸町ではなく他でもよかったというかかわり方から、南三陸町で働きたい

というかかわり方に変わっていく人も多かった。

● I3：「南三陸への思いの変化」

ぼくが何かに貢献したいというか、**震災の復興に貢献したいっていうよりかは、そこに自分が入った方が面白そうだな**って思ったっていうのが一番ですかね。

僕がこの南三陸にかかわり始めてですね、（省略）そこでいろんな事業者さんとか一般の方々とか農家さんとか話をしていく中で、僕はすごくやっぱり魅力的だと思ったんです。**あったかいし、なんかこう僕の故郷って言いたいな**とか思った。

I3は、最初は「面白そうだな」と思って南三陸町にかかわっただけで特段南三陸町に貢献したいというわけではなかった。しかし、その後この南三陸町で働きたいという風に変わっていっていくことを語っている。それは、南三陸町が自己実現のための「手段」から、南三陸町で働くことが自己実現としての「目的」に変わっていったということができるだろう。そして、そこには南三陸を自分の故郷ととらえ、そこに自分の居場所としての意味を見出していることがわかる。

5.2. 人間関係の語り

多くの調査協力者が南三陸町における人的「つながり」の重要性を語っている。

● U4：「震災による多様な人との出会い」

本当、**10年とか20年ぐらいの多様な人間**と、1年2年とか、震災後の3年ぐらいで、ギューってバーっていろんな人に会って…（だから外にいかなくても外の人に会える）

● I5：「ボランティアによる町民とのつながり」

（ボランティアの）**2回目以降は楽しくて、地元の人たちに会いに行って**

るだけだったので、ほとんど感覚が。

ローカル型の若者は、南三陸町内で生活する中で被災することになった。そして被災者として避難所で生活することは、地元の人間関係を再発見するだけでなく、南三陸を訪問する数多くのボランティアを通じて、南三陸の豊かさを知ることになった。

これはUターン型の若者にも共通する。南三陸外で生活をしていたインタビュー協力者らは、東日本大震災をきっかけに南三陸に戻ることになる。被災地での経験は、親族や知人といったつながりを再確認することになった。そして、町の復興に参画するボランティアとの交流が「新しいつながり」となった。なにより、この新しくつながった人々への「恩返し」が南三陸で生活することの目的となっている。

Iターン型の若者にとっての「つながり」は南三陸での新しい出会いである。当初はボランティア活動のために南三陸町を訪れていたが、何度も訪れているうちに「○○さん」という特定の個人に会うために来るようになり、知り合いも増えてゆき、ついには南三陸町に就職し定住するという人もいた。南三陸での人との出会いがその後のライフコースを決定している。

5.3. 働くことについての語り

そして興味深いことは、南三陸の復興が過去にはないビジネスや社会関係の構築をふまえたものであり、これを自身のキャリア形成の一部として語る若者もいることである。首都圏の大学を卒業し首都圏で就職していた若者の中に、自身が理想とする持続可能な循環型の生活を可能とする町として南三陸町に可能性を見出した人や、外部の若者と地域内の人々とが交流できる場を設け地域プランナーとして地域づくりに貢献している人、また、これまでの仕事のノウハウを生かし南三陸町への移住者の支援を展開している人などがいる。彼らに特徴的なことは、仕事を通じて自身のキャリア形成と地域への貢献との両者を結びつけ、そのことをモチベーションとして活躍している点である。それは、彼らが生活していた都会では難しい働き方なのではないだろうか。

● I2「(都会での)従来の仕事のものたりなさ」

いろいろとやってく中で、やっぱそういうふうに現地の人と一緒に、ただ物を送るだけじゃなくて、**現地の人と一緒に何かプロジェクトをやってくっていうことのほうが、今求められてることだなあと感じて、移住を意識し始めた**んですね。

● I4 「仕事と生活の一体感」

こっちで働いてると、仕事をするっていうのと、生活をするっていうのは、境目がすごいファジーな感じはすごいしますね。仕事で接する人と、プライベートで接する人と、ほとんどメンバー変わらないっていうのが、多分、大きいと思うんですけど。(省略) そういう感覚はすごい、こっちで働いてると、強く感じますね。**東京で働くのとは、また全然、違うなっていうのはあります。**

そこには上記の語りに見られるように、都会での(全体の一部分にしかかかわれないという)仕事とは違う満足感や、仕事と生活が結びついていると実感できる喜びを地方の仕事に感じている様子もうかがえる。

5.4. 小括

南三陸町は、東日本大震災以前より過疎地として人口減少を続けてきた。そして震災はさらなる人口流出を生じさせ、その人口は1万人を割ろうとしている。そうした南三陸町に、若者たちはなぜ定着したのだろうか。これまでの語りから考えてみたい。

5.4.1. 地域における人間関係の変容と若者

若者の地方移住に関して、居住地における濃密な社会関係が課題とされることがある。新参者が排除されてしまうといったことは、若者の地方移住のネガティブな側面を強調する際に指摘されてきた。南三陸においても「田舎の社会関係」「プライバシーがない」といった語りによって社会関係・人間関係が

表現されている。ローカル型・Uターン型の若者は田舎の社会関係を避けがたいものと表現し、Iターン型の若者が否応のない義務としてこうした社会関係を語っている事例もあった。

一方で、南三陸町は、東日本大震災の影響から多数のボランティアが参画した場所でもある。ボランティアをはじめとして、報道関係者や有名人、行政職員、工事関係者など、これまで出会うことのなかった人たちと交流する中で生まれた「新しい人間関係」は、地域のポジティブな面もネガティブな面も見つめなおす機会となった。南三陸へのボランティアの参入は、「震災がなければ出会うことがなかった」「一生分の出会い」といえるものであった。こうした経験が地域の人間関係を変えていったと考えられる。

5.4.2. 町の変容を通じた「自己実現」と「ソーシャルな課題」の両立

続いて注目したい点として、インタビュー協力者の多くが「南三陸町への貢献」と「自己実現」の両論を語っていることである。南三陸町への貢献とは、(1) そこで生活することそのものが過疎化に歯止めをかけるという意味での貢献につながっており、(2) ソトの目から眼差すことで町の課題を見出し、(3) 愛着をもって町の復興にコミットしている、ということである。こうした町へのかかわりが、若者の自己実現として位置づいている。

ただし、こうした「自己実現」と「ソーシャルな課題」の両立は、古くからの人間関係と若者のあいだにコンフリクトを生じさせるものでもあった。町の復興とは、(狭義には) 過去にあったコミュニティや人間関係を取り戻すことである。実際、南三陸にいて旧来から続く「つながり」が急速に取り戻されることで、多くの若者がわずらわしさや息苦しさを感じたと語っている。若者にとって過疎地域で生活することは、その地域の「(息苦しい) つながり」と折り合いをつけて生活をすることをも意味しているのだ。

つまり、町の復興、ビジネス、コミュニティといった事柄は、若者の自己実現にとって利用可能な人間関係とも言い得るし、「(息苦しい) つながり」とも言える。こうしたコンフリクトは、Iターン型の若者だけでなく、ローカル型・Uターン型の若者も強く意識していた。これをネガティブに表現するならば町の復興に若者は必要な部分でのみ利用され、若者は自己実現のために町の

復興を利用しているということになる。町から去ったIターン型の若者への評価においては、こうしたコンフリクトが南三陸でも語られている。

しかし、こうしたコンフリクトは新しい価値を生み出す「化学反応」(I3のインタビュー中の言葉)でもある。この化学反応は「復興」と共に生じている。南三陸はこうした復興を目指す長い途上にあるのだ。つまり町の文化や社会関係と若者のコンフリクトをふまえたうえで指摘すべきことは、若者を受け入れるにあたって「復興」をキーワードとし、町が大きな変化のただ中にあることが、若者の「自己実現」と「ソーシャルな課題(の解決)」な事柄を両立させる余地をつくりだしているということである。

6.　条件困難地域の若者たち

本研究の目的は、東日本大震災の被災地である南三陸町の若者のライフコースを分析し、彼らがこの町で暮らす理由やそのありよう、そして復興において彼らの果たす役割を検討することである。

南三陸町において改めて確認しておくべきは、東日本大震災被災地のほとんどがそうであるように、震災以前から人口が減り続け、震災後もその傾向は変わっていないということである。本研究でみてきたように震災を契機としてUターンして地元に戻ってきた者や都市部からIターンとしてやってきた者もいる。そうした若者が多く地域で活動していることは確かである。しかし、全体としてみた場合には震災後も震災前と変わることなく人口は減少を続けている。

それは南三陸町のローカル・トラックについても同様である。高校進学時に町内の志津川高校に行くか、近隣の高校に行くかを選択する段階があり(中には少数であるが仙台市内の高校に進学する生徒もいる)、高校卒業後には、地元で就職するか、町を出て進学・就職するかという次の段階がある。3節で述べたように、近年では地元志津川高校への入学者が減少し、近隣の登米市や気仙沼市、石巻市にあるより大学進学率の高い高校を選択する人が増加する傾向にもある。

さて、こうした状況において町はいかに存続することができるのであろう

か。その際に町の人口のみに注目することは得策ではない。東日本の被災地のみならず、全国で人口減少が問題になっている中で、「町の存続」を人口の増加や人口の維持と考えるならばそれは難しい状況である。町の人口の統計を見ると、おそらく近いうちに南三陸町の人口は1万人を切ることになるであろう。それでも、町の人たちへのインタビューからは人口減少への悲観的な言葉は聞かれない。

- L12：別に（人口が）減ったからといって、それに嘆き悲しむわけでもなく。結局僕らここに生きてるわけだから。生きてる人たちが、僕が別に目指してるのなんて、**人口増加じゃなくて、「ここに住む人たちが少なからず今よりもいい生活を」だったので**。「よく生きるには」をただ突き詰めていくだけって考えると、**減ろうが増えようがあんまり変わらないのかなっていうのは、今では思ってますけど**。

このように人口という量ではなく、そこに生きる人たちの生活の質を重視すべきだという発言は多くの住民から聞かれた。したがって、我々も南三陸の「町の存続」を量的なものとしてではなく、そこに暮らす人々の生活の質としてとらえなければならない。

その際に示唆を与えるのがコミュニティに関する議論である。地域の再生が注目されて久しいが、これを伝統的コミュニティの復興だと考える人はいないであろう。デランティ（2006）は、「今日のコミュニティはモダニティの産物であって、前近代の伝統的世界の産物ではない」と述べている。つまり、今日的コミュニティと伝統的コミュニティは別物であり、今日的コミュニティにはそれ特有の特徴や機能があり、地域の再生とは単なる伝統的コミュニティの再興ではないということである。

それでは今日的コミュニティの特徴とはどのような性質を有するのだろうか。デランティ（2006）によると、今日的コミュニティとは過去に形作られた意味を再生する場所ではなく、意味を創出する過程におけるコミュニケーションによって対話的に創造されるものである。それは、伝統的なコミュニティとは一線を画し、伝統的な家族、親族、階級などから自由であり、より

多様なものを内部に取り入れるようになっているということである。さらに、「コミュニティは境界線の保持という形よりも、帰属に対する積極的な探求の形で表現される傾向が強くなっている」。あるいは、「それによって自己と他者が定義される象徴的な境界線の構築は、たしかに、コミュニティとすべての集団形成の主要な部分ではあるが、それが唯一の側面ではない。同じく重要なのはルーツと帰属の探求である」とも述べている（デランティ 2006:264 下線は筆者）。

整理すると、今日的コミュニティの特徴は次のようになる。コミュニティとは静的ではなく動的であり、意味を所与のものとしているのではなく対話的な活動を通じて意味を生成するものである。そして、その対話的なコミュニケーションによってコミュニティが維持されている。また、コミュニティの境界線による内と外の区別はそれほど意味をもたなくなり、多様な他者を取り込んだ開放的かつ動的なものであると理解できる。その際に重要となるのが先に述べたコミュニティへの帰属感である。

これを本研究の事例に寄せて捉えるならば、南三陸町への帰属感（愛着、「ホーム感」など）には、いずれのローカル・トラックに属する若者の場合でも、震災が強く影響している。そして、町の復興や、町の活性化に向けて、語り、活動し、交流すること（コミュニケーション）を続けることで、彼らはコミュニティを形成し、自らがコミュニティの一員となっているということができる。

7. 南三陸におけるコミュニティの形成

若者が南三陸での生活を選んだ理由を語るとき、彼らなりの合理的な理由が含まれる。そして、南三陸という条件困難地域での生活を続ける際には、「震災」と「ソーシャルな課題」、そして「自己実現」の折り合いをつける必要がある。これまでの若者の語りからは、その折り合いをつける過程において、ある者は大切な人と出会い、ある者は自分のキャリアと向き合いながら、南三陸にコミットしていく様子を見出すことができた。ここで今一度、南三陸町にかかわる若者にとっての震災の意味を確認しながら、彼らが南三陸町の復興に果たす可能性について考えてみたい。

被災地の復興状況は被災前のその地域の特徴に規定され、成長しつつある地域は急速に復興するが、そうでない地域は「被災後きわめて緩慢に復旧するか、あるいは急速に衰えていく」とする研究がある（Haas et al. 1977）。南三陸町は、これまでにも言及している通り、震災前から人口減少が続いており、震災によってその速度は加速している。しかし、「急速に衰えて」いるわけではない。むしろ、海や山がもたらす恵みを求めて多くの観光客が訪れ、被災による壊滅的な状況から復興を遂げた商店街を中心として、町の活力を保っている。それは、震災を経て、町の内外の多様な人たちが交流しながら、南三陸町というコミュニティを復興してきたからだと考えられる。上記のコミュニティ論を援用しながら、震災前から現在へのコミュニティの変容を検討してみよう。

今回話を聞いた若者にとっての南三陸町は、震災によってどのような影響を受けたのだろうか。最もわかりやすいのは震災後に移住してきた人たちの事例であろう。震災前、彼らにとって南三陸町はほとんどかかわりのない地域であった。I5やI6 、I8にとっても南三陸町の名前は聞いたことがあったのかもしれないが、訪れたことのなく、接点もない、地方の町のひとつでしかなかった。

それでは、町に住んでいた人たちやUターンの人たちにとって南三陸町はどのような町だったのだろうか。自分が生まれ育った町であり、ある者にとっては、愛着ある最も安心できる町であっただろう（事例L12参照）。しかし、ローカル型の人たちの中には特に町を意識することもなく、むしろU3やU4のように、都会なるものへの漠然としたあこがれをもっていた人たちも多かった。そういう意味では、南三陸町も「故郷」というよりも、単に生まれた土地、育った土地、住んでいる土地として、特別な愛着も認識していなかった様子が、これらの協力者の語りからはうかがえる。一方、都会についても同様に、それは具体性を有しない理想としてのあこがれであるにすぎないと言えるだろう。そうした意味では、故郷も都会もいずれも具体性をもって強く意識することはないものとして漠然と意味づけられていたと考えることができる。

それが震災によって変わっていく。震災は一言で言えば町を破壊した出来事であった。それは、Uターン型やIターン型の南三陸で生まれ育った者た

ちにとっては、物理的に町が破壊されただけではなく、彼らのこれまでの思い出や記憶を破壊するものでもあった。彼らにとって震災による南三陸の喪失は、町と共にある記憶やこれまでの経験自体が失われていく体験であった。それは彼らにとって、生まれ育ったコミュニティが一時的に喪失したといえる体験であったはずだ。そして、失ったコミュニティを復興させるべく、ある者は町中で救援活動をしながら、町の広さを改めて認識し、町への愛着を強めていく。また、ある者は高校卒業とともに離れた町に戻り救援活動を続け、避難所で町の人たちと毎晩語り合い、ライフコースを変更して町に戻る決断をする。

他方、本研究におけるＩターン型の人たちにとって、震災は南三陸町とのつながりをもたらしたできごとである。ある者はボランティア活動を通じて南三陸とかかわり、その土地の人と出会い、自分が生まれ育った町よりも、居心地のいい居場所となっていく。またある者は、なにか面白いことができる場として、あるいは、自分の理想とする仕事の形を実現できる場として南三陸と出会い、その関係を続けるきっかけとなっていく。彼らにとっても、震災前には具体性を有していなかった南三陸町は、震災によって崩壊したことにより、彼らの前に自分がかかわるべき場所として現前してきたということができるだろう。

上記のボランティア論を援用するならば、震災からの復興は、喪失したコミュニティをもう一度形成する営みであった。その際に重要になるのが、多様な他者とのコミュニケーションである。一次的に破壊された南三陸町には、Ｉターン型の人たちも含めたボランティアや応援に駆け付けた有名人や商売のサポートに駆け付けた人たちなど、震災時にはそれまでにない規模で、今までは南三陸町では会えなかったような人たちがやって来た。Ｕ４の「10年や20年かかって会えるような人たちと短期間に出会うことができ、東京にいかなくても地元の南三陸町で多様な人たちと出会えることができた」という発言は、その様子をよく表している。

今日的コミュニティは動的であり、対話的であり、開放的なものであり、帰属意識をはらむものであった。震災後の南三陸町の内部で起こった絶え間ないディスカッションや復興に向けての活動は、一度崩壊した南三陸という

コミュニティを再び形成するとともに、被災地内外の町にかかわる人たちをコミュニティの一員としてその内部に取り込み、彼らの帰属意識を高めたということができる。その過程において、震災前には出会わなかった外部の人たちとの交流や、内部の多様な人たちとの交流を通じて、南三陸町というコミュニティは震災以前とは異なるものとして形成されているはずである。

第5節でみたように、若者たちが南三陸を選んだ理由は、「地域愛着」「人間関係」「働くこと」であった。そして、第4節での知見のひとつは、南三陸町の若者の「幸福」は、本人の職業選択と地域コミュニティへの参加の程度にもよると考えられることであった。ここで重要な点は、今回話を聞いた若者の職業選択や活動には地域コミュニティへ貢献したいという思いが含意されているという点である。つまり、彼らの「自己実現」と「ソーシャルな課題」(を解決したいという思い)は分かちがたく結びついているということである。一見対立するこれらの2つを結び付けている大きな要因が震災の経験であることはこれまでの語りからもうかがい知ることができる。整理するならば、南三陸にかかわる彼らの職業選択や活動の特徴は、自己実現という個人的なものであると同時にソーシャルなものであり、それは、震災からの復興をめざす東日本大震災の被災地ではある意味必然性のある特徴と言うことができるだろう。そして、こうしたソーシャルな活動(コミュニケーション)はコミュニティを活性化し、その主体者はコミュニティへの帰属を強めることになる。彼らの南三陸への愛着や地域の人々と結んだ人間関係の強さはそのことを表しているのではないだろうか。

こうした南三陸町における多様な人たちのコミュニケーションは、震災から10年以上が経過した現在もなお継続している。本稿で取り上げた若者たちがまさにその主役である。彼らのある者は、地域への恩返しの気持ちをもちながら、観光客や研修生を受け入れ町の魅力を発信している。ある者は、東京時代に培ったデザインの才能を発揮して町のブランド商品を多数創り出している。またある者は、前職で育んだIT技術を駆使して、南三陸町の魅力を日々発信している。

今回話を聞いた若者の多くは、町の中で何度かの転職を経験したり、都市圏での安定した職を辞したり、自分で会社を興したりしながら、南三陸町で

活動を続けている。そのライフヒストリーからは、自分がやりたいこと（自己実現）と自分が誰かのためにできること（ソーシャルなもの）との関係に悩みながらも、そのちょうどいいバランスを南三陸町で実現しようと奮闘する様子を見ることができた。その大きな契機となったのが震災の経験である。

彼らがこうした活動（コミュニケーション）を日々続けていくことにより、彼らはより地域にコミットすることになり、南三陸というコミュニティは新たな意味を生成し続けていくのではないだろうか。

謝辞

本研究は、JSPS科研費20H01650の助成を受けた。

本調査において、長時間にわたりお話を聞かせてくださった協力者の皆様に心より感謝申し上げます。

注

1　本稿は主に第1節～第3節を山本、第4節を岡邑、第5節～第7節を鈴木が担当し、最終的に3名で全体を調整した。榎井・志水・高原・宮前は研究の構想と実施、及び研究データの収集・分析・解釈を担当し、主として第4節～第5節の執筆に貢献した。

2　インターネットを通じた求職といった記述はインタビュー調査から聞かれたものである。しかし高卒後の就職に関しては依然として高校を通じた職業斡旋が主である。また東北に関していえば同郷出身者が多い地域への就職が、都市部での生活の安定をもたらすこと。あるいは「先達」と同じように「一度は町を出る」といった移動（石黒・李・杉浦・山口 2012）がみられる。ただし近年のマクロデータ研究では、90年代以降、地方部から都市部への就職は減少し、進学移動者が比率としては増加するも、実数は減少しつつあることも示されている（遠藤 2022）。

3　本研究では若者を一部の対象者をのぞき30代までとした。3例、40代が含まれるがこちらはいずれも南三陸に生活拠点を移動させた時に20代～ 30代であったケースである。地域においても40代前半までは若者として扱われることもあり、本研究の分析対象者とした。

参照文献

日本語文献

阿部隆

2015 「東日本大震災による東北地方の人口変動（続報）」『日本女子大学大学院人間社会

研究科紀要』21:1-18。

石黒格・李永俊・杉浦裕晃・山口恵子
2012『「東京」に出る若者たち―仕事・社会関係・地域間格差』ミネルヴァ書房。

遠藤健
2022『大学進学にともなう地域移動―マクロ・ミクロデータによる実証的検証』東信社。

片瀬一男
2010「集団就職者の高度経済成長」『人間情報学研究』第15巻：11-28。

苅谷剛彦
1995『大衆教育社会のゆくえ―学歴主義と平等神話の戦後史』中央公論新社。

轡田竜蔵
2017『地方暮らしの幸福と若者』勁草書房。

吉川徹
2019『新装版　学歴社会のローカル・トラック―地方からの大学進学』大阪大学出版会。

佐藤香
2004『社会移動の歴史社会学―生業/職業/学校』東洋館出版社。

田中輝美
2021『関係人口の社会学―人口減少時代の地域再生』大阪大学出版会。

デランティ，ジェラード
2006 『コミュニティーグローバル化と社会理論の変容ー』山之内靖・伊藤茂訳、 NTT出版。

東北経済産業局
2021「東北地域における産業復興の現状と今後の取組～東日本大震災北10年を振り返って～」
https://www.tohoku.meti.go.jp/koho/topics/earthquake/pdf/210209_2.pdf （2022年10月29日アクセス）

安田雪
2003 『働きたいのに…高校生就職難の構造』勁草書房。

山本努
1996『現代過疎問題の研究』恒星社厚生閣。

李永俊・石黒格
2008『青森県で暮らす若者たち』弘前大学出版会。

英語文献

Haas, J.E., Kate, R.W. and Bowden., M.J.
1977 Reconstruction Following Disaster, MIT Press.

Life Course of Young People in the Areas Affected by the Great East Japan Earthquake : Reasons for Living in a Difficult Area and Community Reconstruction

Isamu SUZUKI, Kousuke YAMAMOTO, Ei OKAMURA, Yukari ENOI, Kokichi SHIMIZU, Kohei TAKAHARA, Ryohei MIYAMAE

Abstract

The purpose of this study is to analyze young people in the depopulated areas affected by the Great East Japan Earthquake. One of the characteristics of this disaster was that the affected areas had long been facing various social problems. Specifically, it was a depopulated area with issues of aging and declining population. Population decline became an even greater social problem as a result of the earthquake. The affected areas are facing serious population decline and aging, and young people are losing their bases of livelihood. Minamisanriku, Miyagi Prefecture, where this study was conducted, was devastated by the earthquake. To this day, the population outflow has not stopped.

Despite these circumstances, there are young people who choose Minamisanriku as their place of residence. This study attempted to understand the factors that led young people to choose Minamisanriku as their place of residence, despite the region's declines. Through analyzing the life course of young people in Minamisanriku, we examined their lives in such a difficult area and the impact of the earthquake on them.

The survey results show that the life course of young people who chose Minamisanriku as their base of living can be classified into three categories; U-turn type, who returned to Minamisanriku after once going to school or working in the city center. I-turn type who moved from urban areas to Minamisanriku. Local-type who have lived and worked in Minamisanriku since birth. First, the analysis revealed that their "happiness" depends on their career choices and the degree of participation in the communities. Second, they chose Minamisanriku as their place of residence due to "community attachment," "human relations, "and "self-actualization (employment)". Third, young people cannot remain unrelated to the disaster, and in the process of recovery from the disaster, they become members of the community through communication with local residents, and they are considered to be tackling both social issues and self-actualization.

Keywords : disastered area, young people, life course, community